

第45回 信行寺仏教講座（和讃篇）

第5首「清浄光明ならびなし」

第6首「仏光照曜最第一」

令和6年10月20日（日）

第十三首	第十二首	第十一首	第十首	第九首	第八首	第七首	第六首	第五首	第四首	第三首	第二首	「讃弥陀偈和讃」と十二光
超日月光となつたり	無称光仏となつたり	難思光となつたり	不断光仏となつたり	智慧光仏となつたり	法喜をうとぞのべたまふ	清浄光仏とまうすなり	光炎王仏となつたり	清浄光明ならびなし	一切の有碍にさはりなし	解脱の光輪きはもなし	智慧の光明はかりなし	
超日月光	無称光	難思光	不断光	智慧光	歡喜光	清浄光	炎王光	無対光	無碍光	無辺光	無量光	

清浄光明ならびなし 遇斯光のゆゑなれば
一切の業繋ものぞこりぬ 畢竟依を帰命せよ

（現代語訳）

一切の煩悩をはなれた、清らかなさとより放たれる弥陀如来の光明が、諸仏の光明にすぐれていることは、他に比べるものがない。この光明にお遇いするゆゑ、迷いの世界に繋ぎとめる煩悩悪業は、すべてみな除かれてしまう。究極のよりどころである阿弥陀如来に帰命したてまつれ。

出典

七高僧の第3祖・曇鸞大師
『讃阿弥陀仏偈』



清浄の光明対ぶもの有ること無し。
ゆゑに仏をまた無対光と号けたてまつる。この光に遇ふもの業繋除くる。この故に畢竟依を稽首したてまつる。

語句説明

遇斯光（ぐしこう）・・・

如来の光に遇うこと。すなわち、阿弥陀如来の光明のはたらきを聞くことであり、具体的にいえば如来の名号のおいわれを聞くことである。

しかるに『経』に聞といふは、衆生、仏願の生起本末を聞いて疑心あることなし、これを聞といふなり。
（『教行信証』信文類）



仏願の生起本末とは

阿弥陀仏の本願がどのような理由で起こされ（生起）、その結果どうなったのか（本末）。

生起（しょうぎ）・・・

自らの力では、決して輪廻という迷いの世界から抜け出すことのできない衆生を救うため。

本末（ほんまつ）・・・

「南無阿弥陀仏」という、すべての者を救うことが出来る名号を完成させた。

二種深信（にしゅじんしん）

二種深信とは、信心を機（衆生の側）と法（仏の側）の2つの側面から説明したものである。

① 機の深信・・・仏願の「生起」に対応

自らの力では迷いの境界を抜け出すことができないと信知すること。

② 法の深信・・・仏願の「本末」に対応

そのような私を阿弥陀仏は必ず救ってくださると信知すること。

「遇」はまうあふといふ、まうあふと申すは本願力を信ずるなり。（親鸞聖人『一念多念文意』）

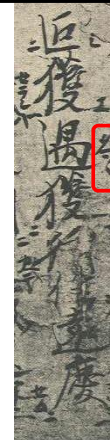
- ・「まい(参り)あふ」の変化したもので、尊い方にお会いする意味。
- ・私の方から予定したのではなく、思いがけずに出あうという意味。
- ・如来の救いは、思いがけなく恵まれた出遇いであったという意味。
- ・遇いがたいものに遇えたという喜びを表す言葉。
- ・「如来に出遇う」ということは、はからいなく本願のはたらきにまかせていることを意味するから、「信心」ともいわれる。

（梯 實圓『一念多念文意講讃』）

『教行信証』 総序

ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。
たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。

ああ、この大いなる本願は、いくたび生を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経ても得ることはできない。思いがけずこの真実の行と真実の信を得たなら、遠く過去からの因縁をよろこべ。



た
ま
た
ま

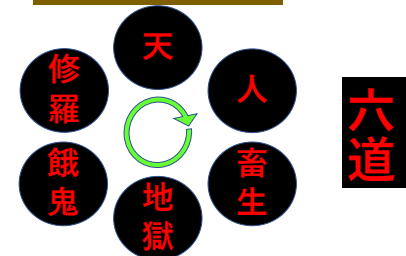
業繫（ごっけ）・・・

煩惱によって悪業を造り、その業によって迷界（六道輪廻）に繋がることをいう。

畢竟依（ひっきょうえ）・・・

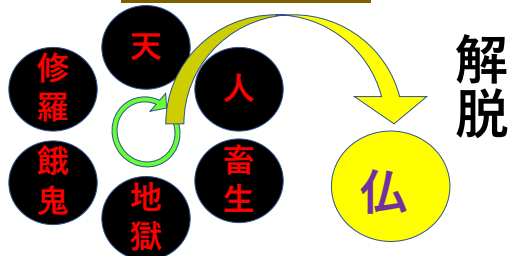
究極のよりどころ。衆生が最後までたよりにする仏ということで、阿弥陀仏のことをいう。

仏教の世界観



我々は、生死をくり返しながら、迷いの世界を転々としている。

仏教の世界観



阿弥陀仏の光明（名号）のはたらきによって、迷いの世界から悟りの世界へと生まれて往く。

仏光照曜最第一 光炎王仏となづけたり

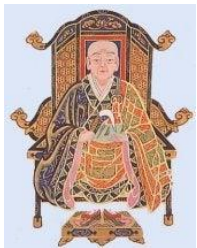
三塗の黒闇ひらくなり 大応供を帰命せよ

（現代語訳）

阿弥陀如来の光明の曜きのすぐれていることは、とても諸仏の光明の及ばないところである。それで光炎王仏と申し上げる。それで、たとえ三悪道の黒闇の中にある衆生でも、この光明に遇う者は、やがて往生を得ることができる。このようなすばらしい徳のある、大応供とも讃えられる阿弥陀如来に帰命したてまつれ。

出典

七高僧の第3祖・曇鸞大師
『讃阿弥陀仏偈』



仏光照曜すること最第一なり。
故に仏をまた光炎王と号けたてまつる。三塗の黒闇光啓を蒙る。
この故に大応供を頂礼したてまつる。

語句説明

照曜（しょうよう）・・・

曜は「かがやく」で、炎のように光がさかんにかがやくすがたをいう。光炎王の「炎」にあたる。

「ワル」について・・・

③ 大^{だい}応^{おう}供^ぐを^を帰^き命^{めい}せ^せよ、
④ 三^{さん}塗^ずの^の黒^{くろ}闇^{あん}ひ^ひら^ひく^くな^なり
光^{こう}炎^{えん}王^{おう}仏^{ぶつ}と^とな^なづ^づけ^けた^たり
同音 仏^{ぶつ}光^{こう}照^{しょう}耀^{りょう}最^{さい}第^{だい}一^{いち}

「ワリ仮名」とは、歴史的仮名づかいの、仮名文字を一字ずつはつきりと別々に読むことである。唱読音の場合は、漢字音の二字仮名のもののみ限定され、例えば「教」は普通は拗音化して「キョウ」と読むが、これを「ケウ」と、又「州」は普通は「シュウ」と読むが、これも「シウ」と一字ずつ別々に読むのである。

(『伝承唱読音概説』)

三塗 (さんず)・・・

「塗」＝「途」＝「みち」。六道輪廻の途中ということ。「三途」とも書く。

六道の中で、最も苦しみの重い地獄道・餓鬼道・畜生道の三悪道をいう。地獄は火に焼かれるので「火塗」、餓鬼は互いに食い合うので「刀塗」、畜生は刀剣で責められるので「血塗」という。「塗」は「途」と同音なるにより用いられた。

つらつら一生の所業を案ずるに、罪業は須弥よりも高く、善根は微塵ばかりも蓄へなし。かくて命空しう終り候ひなば、火血刀の苦果、敢へて疑ひなし。
(『平家物語』平重衡の言葉)

あれこれと一生の所業を考えますと、我が罪業は須弥山(世界の中心にそびえるという高山)よりも高く、善根は微塵ありませんでした。このまま空しく命を終れば、火塗(地獄)・血塗(畜生)・刀塗(餓鬼)の苦果を受けることは、まったく疑いのないことです。

本願力にあいぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功德の宝海みちみちて
煩惱の濁水へだてなし

本願のはたらきに出遇ったものは、むなしく迷いの世界にとどまることがない。あらゆる功德をそなえた名号は宝の海のように満ちわたり、濁った煩惱の水であっても何の分け隔てもない。



三塗の黒闇ひらくなり・・・

悪業のつな（迷いの因）が断ち切られることにより、迷いの世界である三悪道や六道へ行く道が閉ざされて浄土への道が開かれることをいう。

※曇鸞大師の『讃阿弥陀仏偈』には「三塗の黒闇光啓を蒙る」とある。

大応供・・・

「応供」とは、如来の十号のひとつ。まさに供養すべきもの、供養に値するものの意。

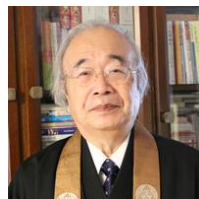
※如来の十号

仏の十種の称号のことで、如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏世尊

なぜ「光」で喩えられるのか？

大田利生（龍谷大学名誉教授）

闇の方から光に向かうのではなく、光の方からこちらに至りとどいて闇が去ります。このように、光から闇へという方向は、如より来生するという如来の意味をうかがわせます。私の方から如来に近づくのではなく、救いの手は如来の方から差し伸べられているのです。（『大乘』2016, 6月号）



大田利生和上（勸学）

親鸞聖人『尊号真像銘文』

「尽十方無碍光如来」と申すはすなはち阿弥陀如来なり、この如来は光明なり。「尽十方」といふは、「尽」はつくすといふ、ことごとくといふ、十方世界を尽してことごとくみちたまへるなり。「無碍」といふはさはることなしとなり、さはることなしと申すは、衆生の煩惱悪業にさへられざるなり。「光如来」と申すは阿弥陀仏なり、この如来はすなはち不可思議光仏と申す。この如来は智慧のかたちなり、十方微塵刹土にみちたまへるなりとするべしとなり。